

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K11402

研究課題名（和文）アスリートの社会貢献活動がもたらす社会的アウトカムに関する研究

研究課題名（英文）Exploring the social outcomes of athletes' social contribution

研究代表者

間野 義之（Mano, Yoshiyuki）

早稲田大学・スポーツ科学学術院・教授

研究者番号：90350438

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：近年、急激に増加しているエリートアスリートが社会的な問題についての発信の社会的影響力に着目した本研究の目的は、日本を舞台として行われたアスリートの社会的発信を文脈として、(1) アスリートの啓発活動が一般市民の意見に与える影響、(2) その影響力の時間的な変化について、科学的検討を試みることであった。インターネット調査を用いた複数の調査から、アスリートによる社会問題に関する発信に触れることで、その社会問題に対する一般市民の問題意識がわずかに高まるという因果関係が見いだされた。また、その影響は介入直後には確認できるものの、3日後には非介入群と同じ水準まで変化することが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

エリートアスリートによる社会的・政治的な問題に関する発信は、ファンだけでなく、多くの人々の目に触れるメッセージだと考えられている。このような発信の影響力は逸話的に信じられてきたものの、実際のどの程度一般市民の意見を変えられることができるのかに関する科学的根拠は十分でない。本研究は、アスリートによる社会貢献や社会的な発信が活性化しつつある日本を舞台に、その影響力を解明することを試みた。本研究で得られた成果は、日本社会におけるエリートアスリートの発言力や社会的な影響力に科学的根拠を加えるものであり、スポーツと社会問題解決の関係性について、有用なエビデンスを提供できたと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to investigate the social impact of elite athletes' communications on social issues, which have been increasingly prominent in recent years. Specifically, the study aimed to (1) examine the influence of athletes' awareness-raising activities on public opinion and (2) analyze changes in that influence over time within the context of athletes' social communications in Japan. Through multiple studies utilizing Internet surveys, a causal relationship was identified between exposure to athletes' communications on social issues and a slight increase in public awareness of those issues. The findings also indicated that the effect of the intervention, while noticeable immediately after, diminished to the same level as the non-intervention group after three days.

研究分野：スポーツマネジメント

キーワード：エリートアスリート 社会貢献活動 アスリートアドボカシー

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

スポーツを通じて社会課題を解決するという政策課題が掲げられる中で、社会課題の認知拡大といったアウトカムを持つアスリートの社会貢献活動を、効果的に活用することが求められる。国際的な社会課題の解決への注目とともに、アスリートは社会貢献活動を通じて存在感を示していくことが求められている。ここからも、今後はさらに多くのアスリートが自発的に社会貢献活動を行っていくことが予想される。このような機運の中で、活動の社会的価値をより多くの人に示すためにも、アスリートの社会貢献活動から生じるアウトカムを実証的に特定し、評価可能な枠組みへ昇華する必要がある。しかし、活動によってもたらされるアウトカムに着目した学術研究は少なく、その研究の蓄積は十分でない。特に、社会へのアウトカムを精緻に評価する際に重要となる時系列データを用いた縦断的な視点での検証が不足している。

2. 研究の目的

本研究は、日本を舞台として行われたアスリートアドボカシーを題材に、(1)アスリートの啓発活動はどのくらい一般市民の意見を変えることが可能なのか、(2)アスリートの啓発活動の影響力はどの程度持続するのか、を明らかにすることで、今後のアスリートの社会貢献活動の在り方に向けた示唆を提示することを目的とした。

3. 研究の方法

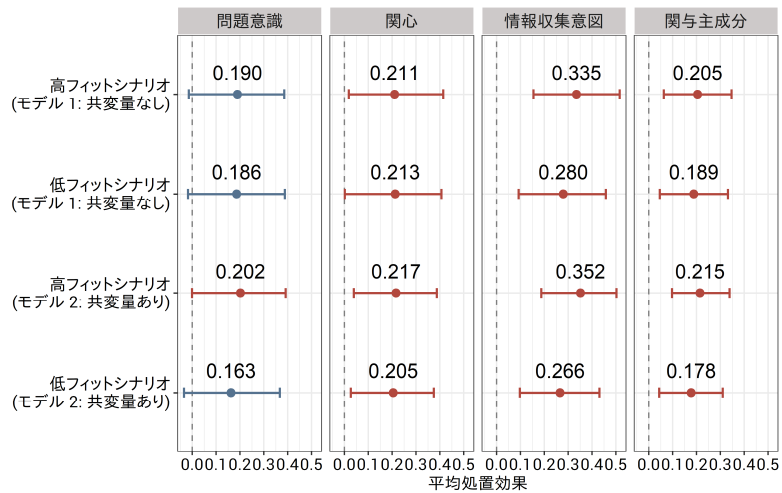
エリートアスリートによる社会貢献活動や社会的な発信に関する先行研究を体系的に整理し、アスリートの活動から生じる社会的なアウトカムを特定した。その後、インターネット調査から得られたサンプルを用いて、アスリートによる社会問題啓発への接触とアウトカムとの関係を実証的に検証した。具体的には、(1)アスリートの啓発活動が一般市民の意見に与える影響を検証するために、横断的な調査と実験的な研究を採用した。(2)影響力の時間的な変化については、インターネット調査を用いた実験調査を縦断的に拡張することで検証を行った。一連の研究では、アスリートによる社会的な発信が急激に増加し、代表的な領域となっている人種問題に対する啓発活動を文脈として設定した。

4. 研究成果

(1) アスリートの啓発活動が一般市民の意見に与える影響

アスリートによる社会的な発信と一般市民の意見との関係を明らかにするために、最初に横断的な調査を実施した。インターネット調査から得られた2,700名のサンプルをもとに、アスリートによる発信の認知と社会的アウトカムの関連を明らかにした。アウトカム項目には、先行研究のレビューから得られた社会問題への関与5側面(問題意識、関心、知識、情報収集頻度、会話の頻度)を採用した。その結果、アスリートの発信を認知しているものほど、人種問題に対する問題意識、関心、知識、情報収集の頻度が高い傾向にあることが示された。一方で、アドボカシーの認知は人種問題に関する会話の頻度とは有意な関連が見られなかった。

続いて、アスリートアドボカシーによるアウトカム形成について、因果の視点から研究を行った。本研究ではインターネット調査を用いたランダム化比較試験を意味するサーベイ実験の手法により、アスリートアドボカシーが持つ説得力を因果の視点から検証した。この実験では、アスリートからの啓発メッセージを受け取る群(処置群)とメッセージを受け取らない群(対照群)を設定し、アスリートの啓発の影響力を検証した。加えて、啓発する社会問題(人種問題)に対する関連の強さをもとに、より適合していると考えられるアスリートの啓発と、適合が低いと考えられるアスリートの啓発でその影響力がどの程度異なるのかを検証した。分析の結果、アスリートアドボカシーへの接触は、啓発する社会問題への意識をわずかに高める傾向にあるものの、その効果は過大評価すべきでないことが示された。加えて、本研究では、アスリートと啓発内容の適合性を操作したシナリオの処置効果に大きな違いは確認されなかった。



(2) アスリートの社会的影響力の時間的な変化

エリートアスリートによる社会問題啓発から生じる影響力は、どの程度持続するのだろうか。本研究は、インターネット調査モニターを対象として、サーベイ実験を縦断的に拡張した実験調査を用いて、社会的影響力の時間的な変化を探索した。この研究では、アスリートによる社会問題啓発メッセージという処置の有無の2条件に加えて、最終的な成果を聴取するタイミングを3条件設定し、ランダムに回答者を6グループのいずれかに割り付けるという手続きを採用した。成果変数を取得したタイミングごとに、処置群と対照群との間で成果変数の平均値がどの程度異なるかを分析した。その結果、介入直後では、問題意識、情報収集意図の項目が処置群でより高い値を示すことが明らかになった。一方で、その効果は、3日後や7日後に成果変数を聴取したグループでは確認されない。つまり、アスリートによる啓発メッセージに触れることで発生するアウトカムは、介入直後には確認できるものの、3日後には非介入群と同程度の水準になることが示された。

| アウトカム | N | 介入直後 | | | 3日後 | | | 7日後 | | |
|--------|-----|------|------|-------|------|------|------|------|------|------|
| | | M | SD | p値 | M | SD | p値 | M | SD | p値 |
| 問題意識 | | | | | | | | | | |
| 処置群 | 548 | 4.18 | 1.32 | 0.04 | 4.18 | 1.36 | 0.36 | 4.19 | 1.36 | 0.34 |
| 対照群 | 536 | 4.03 | 1.38 | | 4.16 | 1.36 | | 4.17 | 1.36 | |
| 関心 | | | | | | | | | | |
| 処置群 | 847 | 4.04 | 1.33 | 0.07 | 3.99 | 1.29 | 0.35 | 3.97 | 1.39 | 0.46 |
| 対照群 | 834 | 3.92 | 1.37 | | 3.96 | 1.34 | | 3.98 | 1.39 | |
| 情報収集意図 | | | | | | | | | | |
| 処置群 | 849 | 3.65 | 1.25 | <.001 | 3.38 | 1.21 | 0.30 | 3.37 | 1.29 | 0.38 |
| 対照群 | 824 | 3.38 | 1.30 | | 3.35 | 1.26 | | 3.38 | 1.29 | |

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|------------------------------------|
| 1. 著者名 Ogiso Waku, Funahashi Hiroaki, Mano Yoshiyuki | 4. 巻 Advance Online Publication |
| 2. 論文標題 Exploring the Link between Exposure to Athlete Advocacy and Public Issue Involvement: An Analysis of Japanese Athlete Racial Advocacy | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Global Sport Management | 6. 最初と最後の頁 1~18 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/24704067.2022.2114924 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 Ogiso Waku, Funahashi Hiroaki, Mano Yoshiyuki | 4. 巻 11 |
| 2. 論文標題 Examining the Role of Source Evaluation in Athlete Advocacy: How Can Advocate Athletes Inspire Public Involvement in Racial Issues? | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Social Sciences | 6. 最初と最後の頁 372 ~ 372 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3390/socsci11080372 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------------|
| 1. 著者名 OGISO Waku, FUNAHASHI Hiroaki, MANO Yoshiyuki | 4. 巻 33 |
| 2. 論文標題 アスリートアドボカシーに対する人々の反応：献身性と適合性をもたらす影響 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Japan Society of Sports Industry | 6. 最初と最後の頁 2_125 ~ 2_140 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5997/sposun.33.2_125 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 小木曾湧・舟橋弘晃・間野義之 |
| 2. 発表標題 アスリートの啓発活動が持つ社会的影響力：社会課題への心理的・行動的関与に着目して |
| 3. 学会等名 日本スポーツ産業学会第30回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 小木曾湧・舟橋弘晃・間野義之 |
| 2. 発表標題 アスリートの啓発活動におけるメッセージ受容のメカニズム：説得の視点からの実証的検討 |
| 3. 学会等名 日本スポーツマネジメント学会第14回大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 小木曾 湧 (Ogiso Waku) (20979116) | 東洋大学 | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|